

Newsletter for JADR

I. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して

JADR会長 小田 豊

(東京歯科大学歯科理工学講座)

大谷啓一前会長を引き継いで、本年1月より会長に就任致しました。昨年、JADRは50周年記念誌を発刊しましたが、これまでJADRの会長や役員をされた先生方の偉業を見るにつけ、重責を感じております。50周年記念誌にも記載されておりますが、本会が1954年に発足した当初は僅か16名の会員であったものが現在では約2,000名の大きな組織になっております。また、JADR学術大会の発表数も1956年の第3回大会の5演題から第53回大会の139演題に増加しております。更に、昨年の第84回IADRブリスベン大会(オーストラリア)には3,595名の出席者の内、日本からの参加者が1,021名と報告されております。約3割に近い日本からの参加者ですから、おそらくIADRの大会において過去最高の日本人の出席と思っております。

この様に、JADRは国内あるいは国際的にも歯科関係者の間でその存在が認識されているものと思っておりますが、その存在意義については様々な意見が聞こえてきます。例えば、「JADRは専門学会でもないし、参加しても自身の研究分野の発表が少なく、興味が持てない。」「沢山学会があるのでJADRに研究旅費を割けない。」「JADRは大会のみで雑誌を発行しないのは学会としての存在価値が問われる。」「JADRに発表するのであればIADRで直接発表の方が良い。」などに表されるように、JADRの役割と存在意義が見え難いとの評もあることは事実かと思っております。国際学会の一つのdivisionであり、歯学研究の総合学会であるために国内の学会の中でも異質な組織と運営形態を持っていることが、その原因と考えられます。今日の歯科医療を取り巻く環境は、基礎歯学と臨床歯学を融合したエビデンスに基づく歯科臨床、国際的視野が益々重要になってくるものと思っております。改めて、当学会の使命と役割を考えたとき「歯科医学および関連分野の研究の促進を図り、口腔保健の向上に寄与するとともに、国際的視野にたつてIADRの発展に貢献し、社会の公益に寄与すること」と謳われた会則の趣旨を再認識して会務運営に当たりたいと考えております。

先般、日本歯科医学会とJADRの役員が今後の両者のあり方について懇談する機会を得ました。歯科医学会ではこれまでの専門分科会に加えて認定分科会の検討が進んでいるとのことですが、前述の通りJADRの性格が他の専門分野をベースにした学会と異なることから、「JADRは専門分科会や認定分科会としての位置づけでなく、日本歯科医学会と連携協力して日本の歯科医学の国際的研究活動の発展に貢献する学会としての役割を果たす」ことで両者の認識の一致が得られまし

た。これまでもIADRのCouncil meetingに日本歯科医学会会長の出席を頂くなど、相互の協力関係はありましたが、両者のあり方を再認識することで、更に緊密な連携が保たれることと期待しております。

今期に行うべき新規事項として、PAPF (Pan Asian Pacific Federation) meetingの開催、法人化の検討、新方式での次期会長選挙、公開シンポジウム、JDR投稿支援、若手研究者の国際学会での発表支援、アジアからのJADR学術大会への参加支援、などが挙げられるかと思っております。PAPF meetingはオーストラリア・ニュージーランド部会、東南アジア部会、中国部会、韓国部会が共同してFederationでは初めて開催される大会ですが、Thailand (SEA Division) または China (Chinese Division) が担当して2009年開催を目指しております。学会の法人化は、任意団体から法的に認知された団体とし、公益を目的とした事業活動を展開する法人となることであり、受託事業、補助金、寄付金等を受けやすくなる、国際的、社会的信用が得られる、などのメリットがあげられます。新方式での次期会長選挙はこれまでの信任方式を改善したものです。公開シンポジウムは総合学会の特色を生かした企画を実現できればと考えております。JDR投稿支援は若手の研究者がIADRの機関誌であるJournal of Dental Researchへの投稿を容易にする体制を整えたいと考えております。何れも容易に遂行できる課題とは思いませんが、執行部はもとより会員の皆様のご協力を得て、今日の時代の要請に応えるのみでなく、これまでの先輩が築いてこられた国際性を生かした本会の運営の一翼を担いたいと考えております。

最後に、改めて会員の皆様のご指導ご協力をお願いしまして、会長就任のご挨拶といたします。



2007年第1回理事会 IADR会長夫妻と黒田敬之IADR前会長を迎えて

II. JADR会長職を退いて

大谷 啓一

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織薬理学分野)

昨年12月末にてJADR会長職を退き、新会長小田豊先生にバトタッチいたしました。会長在籍中はJADR発展のために微力ながら尽くさせていただきました。さらにIADR Baltimore大会、Brisbane大会に日本支部を代表して参加する貴重な機会をいただきました。また、韓国部会、中国部会にも招待され彼の地の会員と交流を深めることができたのは得がたい経験でした。また、黒田敬之先生がIADR次期会長、会長、前会長と一年ごとに大役を果たされるのをJADR会長として陰ながら支えることができました。JADR会長職期間には色々なことがありましたが、何と言っても大事であったのが事務局移転の件でした。学会事務センターが破綻後、事務局が2度変わりました。これは業務に精通したスタッフを確保して事務の仕事継続するという考えから行ったもので、会員の皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。幸い現在の事務局体制は万全ですので御安心下さい。歯科医学発展を目指す若手研究者の皆様には、JADR学会の学術奨励賞、IADR・Hatton賞日本代表候補者などの選考に是非チャレンジして大いに研究能力を高めてください。本会を踏み台に世界に羽ばたく研究者が続々と輩出することを期待します。

つたない会長をサポートしていただいた会員の皆様ならびに評議員、理事各位、執行部として協力いただいた小田豊現会長、村上伸也会計担当理事、安孫子宜光監事に心より深謝いたします。今後もIADRとともにJADRがますます隆盛となることを祈っております。

III. 新任・退任理事からの挨拶

1. JADR退任理事からの挨拶

飯田順一郎

(北海道大学大学院歯学研究科口腔機能学講座歯科矯正学教室)

大谷先生からご依頼を受け、お役に立てるか不安に思いつながらも大役をお引き受けしてから2年間、なんとか本学会の理事を勤めさせていただきました。振り返りまして理事としてどれだけお役に立てたのか惭愧に耐えないところですが、学会の会務に関与させていただく光栄に浴することができたことは大変幸せに存じております。この間、ハットンアワード日本代表候補者の選考、あるいは学術奨励賞の審査などにも関与させていただきました。かなりの昔であります私も審査される立場に立った経験があり、発表者の方々を見るとその緊張感が手に取るように伝わって来ましたが、若手

の先生方の立派な発表に頭が下がる思いがしております。得意ではない英語の世界で、審査する立場であるこちらの方が緊張していたのではないかとさえ思っております。またそれらの審査の過程に触れたわけですが、その選考過程が完璧な公平さでプログラムされていることに頭が下がる思いであります。

ちょうど在任中は黒田敬之先生がIADRの会長でいらっしゃる記念すべき時期でありました。理事会には毎回黒田先生にご出席いただいております。最近のIADR本部において議論されている話題などを報告いただいていたことから、IADRとの関係が非常に緊密に感じられたのも、この時期であったからかもしれません。また、黒田先生が会長として主催されたオーストラリア、ブリスベンでのIADRの大会においてJADRの年次大会を併催したことも、歴史的な時期に会務に携わらせていただいたものと振り返っております。おりしもちょうどサッカーの世界カップで日本代表がオーストラリア代表に敗退した直後の時であり、黒田会長も開会式の挨拶でその事に触れられ、会場が一時沸きあがったことも、いい思い出になっております。

何も出来ないままお役目を辞することを、心苦しく、また申し訳なく存じておりますが、理事の皆様にあたたかく見守っていただきながら、わずかの期間でございましたが大役を勤めさせていただきましたことに感謝いたしております。

本学会の最大の特徴である基礎と臨床の癒合、同じテーブルで基礎と臨床の先生が語り合える場を作り出すことが無理なく見事に運営されている本学会は、我々歯科医学の研究に携わる者にとって非常に頼もしい存在であり、今後益々発展していきますことを一会員として心から祈念いたしております。

2. 理事退任にあたって

今井 奨

(国立保健医療科学院口腔保健部)

2002年から2006年の約4年間、前会長の安孫子先生、会長の大谷先生をはじめJADR理事会の先生方には大変お世話になりました。

私は大学以外の研究機関という立場で理事会に参加させていただきましたがその責務をどれだけ果たせたか甚だ疑問ですが、役員、理事の先生方、事務局の皆様方の暖かい御指導によりまして無事4年間を終えることができました。心より感謝致します。

JADRはIADRの中でも2nd largestの規模を誇り、毎年のIADR総会にも非常に多くの演題を投稿し、参加者数もUSAに次いで多く、世界の歯科研究に多大なる貢献をしていることをこの4年間で改めて実感させていただきました。特に昨年オーストラリアのブリスベンで行われたIADR総会では3,500名強の参加者の実に28%に相当する1,021名の日本人の参加があった

と聞いています。これは参加者数で2番目だったアメリカの約2倍でした。参加者数に逆転現象があった理由は、その3ヶ月前にオランダでAADR学会が開催されたばかりであったことも関係していたと思われませんが、JADR学会がIADRプリズベン大会と共催であったことも大きな要因であったと思われる。プリズベン大会では発表の合間にJADR学術奨励賞に関連した仕事で走りまわって、いつもより慌ただしくはありましたが充実した総会だったという印象が残ります。

日本の歯科関連学会の中でのJADRの立場は必ずしもIADRでの立場と一致しないかもしれませんが、JADRが益々その存在意義を深め、日本の、また世界の歯科研究をさらにリードしていくことを祈念し、退任のご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

3. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) の想い出

根本 君也

(日本大学松戸歯学部歯科理工学教室)

IADRの大会が日本で最初に開催されたのは常陸宮、同妃両殿下のご臨席の下1980年6月5日・7日大阪ロイヤルホテルで、私にとって大変想い出の強い大会でした。それは、プログラムを見たとき私の目指していた研究課題であるコンポジットレジンについての報告が数多く掲載されていたことと、発明者のR.L.Bowen先生が発表されることになっていたことです。当時私の研究レベルはPMMAに如何にして多量のフィラーを混入するかで、ジメタクリレートの発明によってPMMAなしでマトリックスレジンを硬化させるということは夢でした。早速登録して学会に参加しました。国際学会への最初の出席でした。

Bowen先生の発表になったとき、先生は喉の具合が悪いので秘書の女性が代理で発表されました。発表が終わったとき真っ先に私の隣の先生のところに戻ってき、何やら話をしていました。どうもそれがBowen先生ではないかと考え(名前は知っていましたがお顔は知りませんでした)、びっくりすると同時に偶然に同席していたことの驚きは今でも鮮明に覚えています。合間をみて自己紹介したところ快く対応してくれましたので、若さの特権でしょうか調子に乗ってサインまで戴きました。

その年の12月です。突然堀江港三前教授から来年の海外研究者として留学しないかと提案され、来週の教授会までに返事をしなさいとのことでした。正直、海外留学については考えても居なかったし、魅力も感じていなかったのですぐお断りしようと思いました。そこで頭をよぎったのは、もしBowen先生が受け入れてくれるのなら出かけてみたいと考えました。その後NBS(現在のNIST)に留学経験のあった故大橋正敬教授に紹介戴き何とか実現することができました。

研究課題はコンポジットレジン収縮応力の測定でした。数分で硬化する材料の収縮応力の測定は当時の測定方法では殆

ど不可能に近かったのですが、幸運にも治具の開発で練和開始1分後からの測定に成功しました。帰国間際に昨年のIADRでお会いしたことを覚えていてくれたことが判り、留学を認めて頂いたことを知りました。まさにIADRに参加したお陰であったことに感謝致します。

私の人生を変えた国際学会の重要性は今後の若き研究者にも大きな糧となることでしょう。今後もIADRおよび日本部会の発展を心からご祈念申し上げ、歯学研究の中心として益々寄与されることを期待申し上げます。

JADRの理事に入れて戴けたことはこの上ない喜びであったとともに、任期終了にあたり安孫子前会長を始め関係の先生方に深く感謝申し上げます。

4. JADR新任理事からの挨拶

佐野 司

(東京歯科大学歯科放射線学講座)

この度、JADR理事を仰せつかりました東京歯科大学歯科放射線学講座の佐野司と申します。JADRは先達およびメンバー各位のご尽力により、IADRの部会の中でも目覚ましい発展を遂げてまいりました。IADRに対する寄与が特筆すべきものであることはJADR 前会長大谷啓一先生がご報告された前号のNewsletter for JADR のなかの“若手研究者とIADR Brisbane 大会”に集約されております。ここでは、JADRのさらなる可能性についてお話したいと存じます。

昨今、日本の歯科医学を取り巻く状況は極めて流動的であり、関連分野における改革の必要性から様々な要請があります。歯科医学の研究の歴史を紐解くと、基礎歯科医学および臨床歯科医学に密接に関連した基礎歯科医学の研究が中心であったと申し上げても過言ではありません。しかし、この歴史に新たに臨床歯科医学の研究が存在感を以って大きな位置を占めようとしています。ご承知のように厚生労働省は、欧米各国と比較して日本における標準的治療法の普及がなされていない現状を鑑みていわゆるEBMに基づいたガイドライン策定を勧めています。ガイドライン策定には、エビデンスを得るための大規模臨床研究が必要となります。例えば新しい治療法を評価する際、多くの施設で同一の治療を患者さんに施します。また、前治療法やいわゆるプラセボのみを講じる患者さんを伴ったコントロール群の設定が必要となります。この研究ではもちろんのこと一貫して倫理的な配慮が必要となります。しかし、現状では、このような大規模臨床研究の施行は困難であり、その結果、エビデンスが得られている診療体系が極めて少ない中でさらに日本人固有のデータに限られている等の問題が生じています。そこで、すでに公表されたデータを用いてのメタアナリシス等、その代用の方策が講じられていますが、各臨床系の学会では総じて頭を痛めているのではと推察します。JADRは、専門領域が多岐にまたがり、国際的な交流を密に行うことができる日本における唯一の

multidisciplinaryな組織と自負しております。このような組織においてのみ、現実的な大規模臨床研究のデザインから代用の臨床研究の構築までが可能であるのではと考えます。

話がかかりますが、以前に一部ジャーナリズムが私立大学での臨床活動の重視傾向を指摘したことがあります。これは、1994年発刊の"Nature"に当時東京慈恵会医科大学に在籍されていた山崎茂明先生が書かれた日本の大学における生命科学分野での論文生産性に関する論文（Ranking Japan's life science research.）を引用していました。ご存知の方も多いと思われませんが、生命科学に関する論文を米国立医学図書館のmedlineから調査して、各大学の総論文数、研究者一人当たりの論文数を算出しています。その結果、総論文数で慶応義塾大学が130編で第7位にランクされているものの、上位に他の私学の顔がみられません。現在では、私立大学および独立行政法人化した国立大学・大学院も状況は同様であり、臨床活動に加え教育活動の重視傾向は全ての大学・大学院に共通した指摘事項と思います。私は米留学中に多忙な放射線医に師事していましたが、彼が昼食片手に、テープに論文内容を録音しているところを多く見かけました。録音テープはeditorial assistantと呼ばれる編集作業の専門家へ渡し、いわゆる口述筆記され翌日には論文の原型が彼の元へ手渡されていました。論文作成に関する体制や役割分担が明確であり、それぞれが効率よく機能していたのを記憶しています。このような研究をサポートするシステム作りにはやはりJADRの関与が必要かと思えます。

以上、雑駁な話となりましたが、この大任をお受けいたしましたうちは鋭意専心、JADRの発展のために精励いたす所存でございます。

5. JADRの理事を拝命して

中垣 晴男

（愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座）

この度は伝統あるJADRの2008年総会、第56回JADR総会・学術大会を、我が愛知学院大学で開催するというご指名を、小田会長から亀山歯学部長を経て賜りました。さらに、本会の理事も拝命致しました。大変光栄なことと感謝申し上げますとともに、身が引き締まる気持ちでいっぱいです。

本会はIADRの日本部会として1954年に発足して以来、IADRの中心的な部会として途中DivisionからSocietyと変更し、輝かしい発展をされてきています。代々のJADRの会長、役員の方の先生方のご努力に敬意を表します。

個人的には、亀山洋一郎先生（愛知学院大学歯学部長、2007年4月より愛知学院大学名誉教授）のご推薦をいただき、1999年～2006年に評議員を務めさせていただきました。また、本会へ入会致したのは1979年ですので、会員歴としては27年を過ぎました。

本会の特徴には、国際学会の一部であり、英語で発表され

ていることがあげられます。しかし、それ以上に魅力的であるのは、基礎、臨床、いろいろな専門分野の研究者によって行われる発表やシンポジウムのテーマについてディスカッションがあることです。日本の学会は専門分科化がすすんでいて、なかなか総合的な討議の機会が少ないのが現状であるように思います。さらに、Hatton Awardsのような有名な賞がいくつもあり、将来性のある若い研究者の国際的な研究を支援するシステムがすばらしいと思います。

来年の2008年に愛知学院大学歯学部において第56回の総会・学術大会をお引き受けすることになりましたが、まだ、その詳細は決まっておられません。本学歯学部の全面的な支援を得て、2008年11月29日（土）・30日（日）に大学を会場として、気持ちでは内容のある有意義な会を開催することを予定しております。

どうか第56回大会の企画・内容等につきまして、意見やご希望を賜れば幸いです。終わりに今後のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

6. JADR新任理事として

中嶋 裕

（明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科生体材料学分野）

このたび日本歯科理工学会から2007年よりJADR理事としてJADRの活動に参加いたすことになりました。

一般科学研究だけでなく歯学領域におきましてもGlobalizationの重要性が唱えられてから随分と時代が経過していると思います。JADRが所属するIADRはまさにこのGlobalizationを具現化するための組織として構成されております。IADRを支える各地域チャプターの基盤強化はこのIADRの目的を達成する上で重要な鍵となると思います。日本における研究レベルの高さは疑いもなく国際的にも注目されていることは周知のことです。また、IADR総会では、日本人研究者が多数の研究発表が行っております。このことからIADRにおける日本の位置付けは重要なものと考えます。ここまで来るには多くの優れた諸先生方のご努力の賜物と共に、JADR活動を地道に続けてこられた先生方のご尽力によるものと思います。JADRならび日本人研究者のIADRの活動を維持するだけにとどまらず、益々活動を活発化させていくことが今後も大切だと思います。

歯科医学領域の研究は、今でも大学における研究活動が主体となっております。しかしながら、近年の大学教育の改革ならびに学生意識の変化から大学の教員が研究活動に従事する時間がだんだんと少なくなっているといわれております。研究活動の主体となる若手や中堅の大学教員が研究活動に専念する環境が悪化していることは、JADRの活動にとってもやがて影響がでてくるものと予想されます。今後の日本での研究レベルを質・量とも維持・発展させてゆくには、若手研究者ができるだけ研究に専念できるような環境整備をはじめとして、研究者育成に重点をおかねばならないこと当然のこと

と思います。そして将来有望な研究者を積極的に国際舞台に押し出してゆかねばならないと思います。JADRがその活動を通じてこのようなことを協力することができれば日本のためだけでなくGlobalな貢献ができるものと考えております。

今までIADRではDental Materials GroupにてGroup businessを一部担当してまいりました。その経験をこれからのJADRの会務・運営にいかせればと思っています。まさに微力ではございますが、JADRならびにIADRの発展に貢献できれば幸いです。

7. ご挨拶

花田 信弘

(国立保健医療科学院口腔保健部)

理事就任にあたりご挨拶をさせていただきます。国際歯科研究学会 (IADR) は、基礎と臨床の研究者が一堂に会する学会として長年機能し、世界の人々の口腔保健の向上にとって大変重要な役割を担っています。JADRは雑多な国内学会の一つではなく、わが国の若い研究者をIADRという国際舞台に登壇する研究者を育てるという視点で企画・運営する必要があると考えています。もとより学間に国境はなく、日本だけに限定された研究は存在しません。わが国の地域保健の研究においても国際比較が重要な意味を持っています。ヨーロッパでは、IADR Pan European Federation (PEF) が結成され、既に学術大会が3回開催されています。私は、2002年のCardiffから昨年のDublinまでの3回のPEFに参加しました。この経験を生かして、これからは、アジアのFederationミーティングの発展のためにJADR理事として貢献したいと思います。統合に向かうヨーロッパといつまでも分裂気味の東アジアでは比較にならないのかもしれませんが、アジアのFederation (PAPF; Pan Asian Pacific Federation) は、PEFに次ぐ2番目のFederationだと聞き及んでいます (2003年のNewsletter for JADR, 黒田副会長 (当時) の報告)。PEF,PAPFに続いて、North America, Latin America, Africa Mideast にFederation が結成され、IADRは世界5つのFederationの連合体になるようですが、新しく生まれたPAPFの中でJADRの存在感を示すことが、これからの理事の役割だと思います。もとより浅学非才ですが、PAPFとJADRの発展のためにできる限り貢献したいと思います。よろしくご挨拶致します。

最後になりましたが、私が所属する国立保健医療科学院の紹介をいたします。本院は、平成14年埼玉県和光市に設立された厚生労働省の研究・研修機関です。口腔保健部の前身は国立予防衛生研究所歯科衛生部で、1958年 (昭和33年) 品川庁舎で発足しました。1992年 (平成4年) 戸山庁舎へ移転後、国立感染症研究所を経て2002年 (平成14年)、国立保健医療科学院に統合されました。

口腔保健部は、口腔保健及び口腔に関連する疾患の予防技術の評価、及びこれらに関する調査及び研究に関することをつかさどるため、口腔保健情報室と口腔保健技術室を置いて

います。口腔は摂食機能、ことばや表情によるコミュニケーション機能、感覚機能、生体防御機能を担い、QOLや健康寿命を支えています。そこで口腔保健部では、口腔疾患および機能障害に関する研究発信のナショナルセンター化を目指して各種の調査、研究を行うとともに、医療保健福祉の専門家に対する研修を行っています。

8. JADR新任理事としてのご挨拶

平井 敏博

(北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座)

この度、小田豊会長のもとで、理事を務めさせていただくことになりました。よろしくご挨拶申し上げます。

数ヶ月前にJADR小田次期会長から、(社)日本補綴歯科学会 (Japan Prosthodontic Society : JPS) を代表する者の理事への就任要請があり、赤川理事長から次期理事長予定者である不肖平井を推薦したい旨の打診を受けました。現在、JPSは、Asian Academy of Prosthodontics (AAP), Korean Academy of Prosthodontics (KAP), International College of Prosthodontists (ICP), Greater New York Academy of Prosthodontics (GNYAP) との交流を行っております。6700余名のJPS会員がJADRを通じてIADRの中でさらなる幅広い活動を行うことは、国際交流の一層の推進につながるものと考え、その申し出をお受けいたしました。また、IADR Prosthodontic GroupのPresidentを務め、現在はIADR/AADR CouncilorとなっているUCLAのProf. Neal Garrettは、個人的なことではありますが、20数年来の友人であります。必ずや彼も応援してくれるものと思います。

さて、ご承知の通り、歯科補綴学は生命科学や健康科学をベースとする実学であり、人々の健康・福祉の向上に貢献する役割を担っております。そして補綴歯科臨床の特徴は、齶蝕や咬合・咀嚼障害などの疾患や障害に対する予防と治療に加えて、歯などの喪失により損なわれた形態的・機能的障害の改善や回復を目指すリハビリテーションの面を併せ持っていることです。このことから、歯科医学における唯一の総合学会であるIADR/JADRでのJPS会員の学術活動は、歯科医療の発展に必ずや寄与するものと考えます。

今、歯科を含めて医学・医療は大変革のまっただ中にあります。そして、臨床現場に身をおく者にとっては、病院収支バランスの改善、リスクマネジメント、感染対策などに費やす膨大なエネルギーや、研修医制度の義務化に伴う教育の負担増などによって、仕事量が増大しております。このため、研究活動に割く体力も時間も逼迫しているのが実情です。しかし、歯科医学研究は、現在の教育と臨床の基盤を支えているばかりではなく、これらの方向性を決定する羅針盤でもあります。このため、学術研究活動は欠くことができません。IADRは歯科医学に関する卓越した学術団体であり、名実ともに世界で唯一の団体です。そして、JADRはそのIADRを支える大きな柱の一つです。JADRの活躍なくしてIADRの活性化

はあり得ないと思います。JADRの発展のために微力ながら尽力いたす所存です。よろしくお願い申し上げます。

IV. 2006年度学術奨励賞を受賞して

大野 充昭

(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科顎口腔機能制御学分野
口腔生化・分子歯科学分野)

このたびは2006年度学術奨励賞を受賞させて頂き、ありがとうございます。

骨再生療法は古くから自家骨移植が行われてきましたが、近年、生物学的、生体材料学的な研究の発展により飛躍的進歩により、現在では細胞移植、ハイドロキシアパタイトなどの骨補填材移植、成長因子療法、またはこれらの因子を組み合わせた再生療法が試みられています。しかし、これらの新しい再生療法は、まだまだ安定した臨床成果を獲得するに至らず、その原因の一つとして、複雑な再生の場の環境を十分模倣できていないことが考えられます。

そこで本研究では骨組織の再生を目的に、軟骨再生や血管新生能のある多機能な成長因子である結合組織成長因子(CCN2/CTGF)に着目し、CCN2/CTGFが骨髄由来間葉系間質細胞に対する効果、および骨再生の可能性を*in vitro*, *in vivo*両面から検討を行いました。その結果、CCN2/CTGFの骨再生への有用性およびそのメカニズムの一部を明らかにすることができました。

今後はより臨床に近いモデルでの検討および臨床への応用を目指したいと考えています。また、皮膚、粘膜などの他の組織再生への応用や幹細胞のニッチとCCN2/CTGFの関係などより分子生物学的検討も行っていく所存です。

菅原 康代

(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野)

第84回IADR総会(Brisbane, Australia)と併催された第54回JADR学術大会において学術奨励賞を受賞させていただきました。受賞の対象となったのは“Micro-elasticity of osteoblast and osteocyte”です。賞をいただいたことを大変光栄に感じております。

私は岡山大学大学院歯学研究科時代に骨の研究の基礎を学び、特に骨中の骨細胞に注目して研究を行いました。骨細胞は骨芽細胞から分化する際に形態を変え、樹枝状の突起を持つようになります。この突起は骨中でネットワークを形成していますが、骨細胞は周囲を堅い骨基質中に覆われているためにその3次元的構造をとらえることが困難でした。私たちの研究グループは共焦点レーザー顕微鏡を用いて、骨細胞のアクチン線維を蛍光染色することにより、その3次元的構造

をとらえ、形態計測を行いました。

本研究はその手法を応用し、さらに骨細胞と骨芽細胞の機械的性質を知るために川崎医科大学の教室の先生方と共同研究を行った成果を報告したものです。その研究内容は、まず、骨中の骨芽細胞から骨細胞への分化の形態変化とその表現型の変化を3次元的にとらえました。その後生きた骨芽細胞と骨細胞を単離する技術を使うことにより、原子間力顕微鏡を用いて細胞の機械的性質を調べました。その結果骨芽細胞から骨細胞へ分化するに従い、その細胞の硬さをやわらかくしていく事が分かりました。また、骨芽細胞の機械的性質には細胞接着が密接に関わっていることも分かりました。このように本研究では堅い骨基質中に覆われているために調べることが困難であった骨系細胞の機械的性質を捕らえました。

今後は今回の受賞を励みにし、尚一層努力してまいりたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。最後になりましたが、様々な機会を与えていただきました岡山大学山本照子教授(現東北大教授)、上岡寛助教授、川崎医科大学梶谷文彦教授、辻岡克彦教授、片岡則之先生、橋本謙先生らにぜひご指導御協力いただいた共同研究者の方々はこの場をお借りして感謝いたします。

玉井利代子

(朝日大学歯学部口腔感染医療学講座口腔微生物学分野)

2006年度開催の第84回 IADR 総会(Brisbane; 第54回JADR学術大会)にて行われた研究発表を対象とした JADR 学術奨励賞を受賞いたしました。発表2ヶ月後に選考結果のお知らせを受け、賞状と副賞をいただきました。本賞は、学術大会での研究発表活動を奨励するとともに、歯学の発展に寄与する38歳未満の若手研究者の育成を目的として、2004年度(第52回学術大会時)よりスタートした賞で、今年度は5名に授与されました。

歯周病原細菌の歯肉上皮細胞などの歯周組織細胞への侵入機構の研究は、これまで、主として細菌由来の侵入にかかわる分子に着目したものが多くみられました。本研究では、歯周病原細菌 *Porphyromonas gingivalis* の侵入における宿主細胞表面タンパク分子の関与について検討しました。これまで *P. gingivalis* はオートファジーを利用することで宿主細胞内で生存しうることが報告されていましたが、*P. gingivalis* 侵入初期からオートファゴソームへ至る過程については不明でした。本研究は、*P. gingivalis* の歯肉上皮細胞への侵入の際に宿主細胞の接着分子やカベオラが関与することを明らかにし、同菌の宿主細胞への侵入からオートファジーに至る経路を示唆しました。すなわち、近年急速に発達したRNA干渉法を用いて、宿主細胞のタンパク質分子をノックダウンし、*P. gingivalis* のヒト歯肉上皮細胞への侵入におけるこれら分子の役割の一端を明らかにしました(Tamai et al. Requirement for intercellular adhesion molecule 1 and caveolae in invasion of human oral epithe-

lial cells by *Porphyromonas gingivalis*. Infection and Immunity. 2005年10月, 73巻10号: 6290-6298)。歯周病原細菌の歯肉上皮細胞への侵入機構について検討することにより得られる基礎情報は、歯周病原細菌による歯周病の発症や病態の慢性化において新たな知見を与えることが考えられます。

2006年10月から奥羽大学歯学部口腔病態解析制御学講座口腔細菌学分野に赴任いたしました。これからもこの賞を励みに研究を続けていきたいと思っております。

最後になりましたが、これまでにお世話になった数多くの方々にあらためて御礼申し上げます。

樋口 和徳

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織構造生物学分野)

この度は、2006年度のJADR学術奨励賞を受賞させて頂き、大変名誉に思っております。私は現在、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織構造生物学分野に在籍し、高野吉郎教授の下研究を行っております。われわれはメダカを歯の再生研究モデルとして用いることを提唱しており、今回賞をいただいた研究はメダカの咽頭歯に着目した研究であります。メダカは成魚でも全長が30ミリ程度と小型であり、実験モデルとして優れています。また大きさ1mm×500 μ 程の咽頭骨が上下顎にあわせて4個あり、それぞれに200本を超える咽頭歯が生えています。この咽頭歯と咽頭骨が作る咽頭歯骨ユニットのサイズの小ささは、歯の発生から脱落に至るまでの過程を形態的に精査する上できわめて好都合であり、さらにこの咽頭歯骨ユニットは歯胚を傷つけることなく容易に一塊で摘出できることから器官培養に特に有利であります。またメダカは、孵化後しばらくは全身がほぼ透明であり、歯を含む骨格の発達の様相をある程度体外から直視することができますし、必要ならば目的タンパクの遺伝子にGFPを組み込んで標識タンパクの実際の動態を蛍光顕微鏡下で観察することも不可能ではありません。さらにメダカはすでに全ゲノムの解析がほぼ完了しており、ヒトの様々な疾患に対応する突然変異メダカも次々と作製されております。ヒト疾患の分子機構解明のための膨大なデータが蓄積されていることは、メダカを使って歯の再生研究を遂行することの大きな利点であります。しかしこの魅力的なメダカ咽頭歯の形成過程や脱落、交換の仕組みの詳細はこれまでほとんど知られていなかったのが実状であります。今回の研究はこの複雑なメダカ咽頭歯の形成過程や脱落、交換の仕組みを解明する一端となるものであったのではないかと考えております。今後、われわれの教室では、更に研究を進め、近い将来、多性菌性動物における歯の形成、脱落のメカニズム、交換の仕組みを解明し、幹細胞を特定にいたるよう研究を進めていくつもりであります。私は幸いなことに高野教授に直接指導していただいております。教授は、幅広い知識を持ち、いつも適切なアドバイスをしてくれます。新しい発見の日々であり、このような環境の

下で研究できることにとても満足しております。今回の受賞を励みにし、さらに一層研鑽していきたいと思っておりますので、今後とも何卒宜しくお願い致します。

鷲尾 純平

(東北大学大学院歯学研究科口腔生化学分野)

このたび、Australia Brisbaneで行われました第54回JADR学術大会(第85回IADR総会との共催)におきまして、2006年度JADR学術奨励賞を拝受いたしました。ありがとうございます。簡単ではありますが、受賞しました発表内容を一部紹介させていただきます。

これまで、口臭に関連する口腔細菌としては、*P. gingivalis*などの歯周病関連細菌が主に研究されてきました。しかし、実際には歯周病や他の口腔疾患がない患者にも口臭を認めるケースが多くあり、それらの口臭原因は、前述の歯周病関連細菌以外の細菌にもあるのではないかと考えました。そこで、大学院博士課程の研究テーマとして、特に口腔疾患をもたない患者の口臭(生理的口臭を含む)に注目し、それらの主要発生源であると考えられる舌苔中に存在する細菌、特に口臭成分の一つである硫化水素(H_2S)を産生する菌を検索して口臭との関連を検討したところ、口臭の有る被験者の舌苔中では H_2S 産生細菌数が有意に高いことが分かりました。さらに、これらの H_2S 産生細菌を分離同定したところ、今まで口臭との関連がよく研究されて来た歯周病関連菌ではなく、*Veillonella* sp.や*Actinomyces* sp.といった口腔に常在する細菌が多勢を占めることがわかりました(*J Med Microbiol* 54(9): 889-895, 2005)。この結果に基づき、今回受賞した研究では、その中で最も検出頻度が高かった3種の*Veillonella* sp. (*V. atypica*, *V. dispar*, *V. parvula*)について、 H_2S 産生能、および H_2S 産生に関わる代謝システムと口腔環境pHとの関係を検討しました。

3菌種とも、含硫アミノ酸であるcysteine、生体内含硫物質であるglutathioneから H_2S を産生しました。しかし、methionineからは H_2S は産生されませんでした。各基質からの H_2S 産生量はpHによって異なり、cysteineはpH 6-7で、glutathioneはpH 8で高く、pH 5では両基質からの酸産生は低くなりました。さらに、口腔*Veillonella*の増殖能はpH 6-7で高く、pH 8でやや低く、pH 5ではほとんど増殖しないこともわかりました。これらの結果から、①口腔*Veillonella*は H_2S 産生の基質としてcysteineやglutathioneを利用すること、②環境pHが中性のとき H_2S 産生能および増殖能とも高くなることが初めて明らかになりました。実際の口腔内を考慮すると、口腔内pHが中性付近になる食間時等に、*Veillonella* sp.が増殖し、さらに H_2S 産生能が上昇することで、口臭レベルが高くなる可能性が考えられます。

今回の受賞を糧に、今後は*Veillonella* sp.の H_2S 産生機構に加え、口腔細菌の口臭産生機構を生化学的、分子生物学的に明らかにし、さらには口腔バイオフィルム内、口腔生態系の口臭産生を対象として生態学的に広く検討して行きたいと考

えています。そして、これらの研究成果が口臭予防法の開発に繋がれば幸いに思います。最後になりましたが、本研究の遂行にあたり、御指導、ご協力いただきました諸先生方に御礼申し上げます。

V. Education Research Group Faculty Travel Awardを受賞して

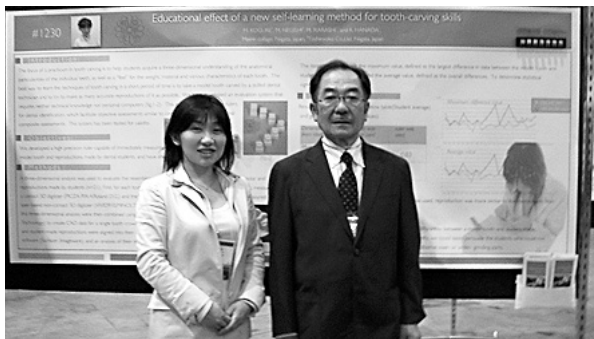
木暮 ミカ
(明倫短期大学)

2006年のIADR総会・学術大会（オーストラリア・ブリスベン）において発表いたしました、'Education effect of a new self-learning method for tooth-carving skill' が教育分野の発表の中から選出されるEducation Research Group Faculty Travel Awardを受賞いたしました。発表内容は、誰もがカービング技術を簡単に習得できるように、手本模型と実習物の差を随時三次元的に判断するための補助ツールとして開発した高精度ルーラーの教育的効果について分析したものです。おかげさまで用意してきたリーフレット100部はあっというまになくなり、ディスカッションタイムでは多くの先生より質問をいただくことができ、洋の東西を問わず技術・技能伝承教育に対する関心は高いのだということをおぼろげに実感しました。また、自分の仕事が世界的なレベルでどの程度興味を持ってもらえるのかを直接肌で感じることができ、とても良い刺激を受けました。

今回の受賞を励みに、今後とも歯科教育や臨床に貢献できる研究成果を日本から発信できるよう、研鑽を積んで行きたいと思います。

最後に、本研究の発表に際しまして多くのご指導をいただき、ブリスベンにおきましてもご助力を賜りました花田晃治先生、ご協力いただいた共同演者の皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

※発表内容に関するHP…<http://www.meirin-c.ac.jp/~kogure/>



発表会場にて（右は花田晃治先生）

VI. 第7回アジア予防歯科学会学術大会 (7th Congress of Asian Academy of Preventive Dentistry) を主催して

第7回アジア予防歯科学会学術大会 準備委員長 山本 龍生
(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔保健学分野)

第7回アジア予防歯科学会学術大会が渡邊達夫大会長（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授）のもと、平成18年（2006年）11月29日、30日および12月1日に岡山市で開催された。この学術大会はIADR Pan Asian Pacific Federationのほか、WHO、日本口腔衛生学会、日本歯科医師会、日本歯科衛生士会の後援を得た。

アジア予防歯科学会学術大会は、平成6年（1994年）、境 脩大会長（現福岡歯科大学名誉教授）のもとで第1回大会が福岡市で開催されて以来、2年に1回、韓国、タイ、中国、インド、インドネシアと回を重ねてきた。

アジア予防歯科学会学術大会は、アジアの歯科大学関係者、歯科医師、歯科衛生士、行政に携わる人々が一堂に会し、歯科疾患の予防に関する情報を交換するとともに、アジアに住む人々の口腔の健康を保持増進することを目的としている。

第7回の大会のテーマは「Health-oriented Concept in Dentistry」であった。この概念は、「齲蝕を治し、予防する。歯周病を治し、予防する」という従来の疾患を発想の原点とするものとは違い、「目の前にいる人の健康を保持増進するために歯科の専門家として何が出来るか」という健康を発想の原点とした考え方である。

このテーマのもと、特別講演が2題、シンポジウムが4つ、テーブルクリニックが2つ、そして82題のポスターディスカッションが行われた。特別講演は、WHOの歯科の主任であるPoul Erik Petersen先生（代理 小川祐司先生）「Global Aspect of Health-oriented Concept in Dentistry」とペンシルベニア大学のRobert J. Collins教授「Health & Oral Health in the USA - the Impact of the Healthy People 2010 Objectives」によって行われた。シンポジウムはアジア各国の研究者、行政の歯科保健担当者などにより歯科疾患実態調査、フッ化物応用、タバコ、う蝕リスク試験に関するものが取り上げられた。テーブルクリニックは口臭とつまようじ法（歯周病予防・治療のためのブラッシング法）についてランチョン形式で行われた。また、日本の歯科関連企業による展示も行われた。

学会参加者は日本から162名、外国から98名であり、韓国の61名をはじめ、インドネシア、中国、マレーシア、タイ、ネパール、トンガ、オーストラリア、ラトビア、カナダの11カ国からの参加があった。この学会では日本と韓国が重要な地位を占めている。Look Eastと言われていた頃、東南アジアの国々は日本、韓国に熱い視線を送っていた。何故ならアフリカ諸国や東ヨーロッパ諸国は西欧と盛んに交流し援助を受け

ていたし、南アメリカはアメリカ合衆国から応援があったけれど、東南アジアは援助の空白地帯であったからである。その頃、日本と韓国の研究者は殆どが西欧先進国を見つめていた。予防歯科学だけでもアジア人によるアジア人のための学会を盛り上げる必要があった。

平成16年（2004年）からはアジア予防歯科学会（Asian Academy of Preventive Dentistry）のオフィシャルジャーナルとしてInternational Journal of Oral Health（編集長 渡邊達夫）が創刊され、年1回発行されている。創刊号は過去の学術大会の大会長のコメント、パリの第6回大会の抄録のほか、原著論文が2報であったが、2005年の第2巻は総説が1報と原著論文が5報、2006年の第3巻は原著論文が6報と内容も充実してきている。また、2005年にはISSN番号を取得した。

次期の学会は、2008年に韓国の済州島で行われる。また、2010年にはマレーシアで行われる予定である。JADR会員の方々にも是非、積極的な参加をしていただき、アジアの口腔保健の向上に寄与していただきたい。



第7回アジア予防歯科学会学術大会会場

Ⅶ. 理事会総括報告

JADR幹事 青木 和広

（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織薬理学分野）

昨年度の理事会は、例年通り4回（2月20日、5月22日、8月28日、11月27日）開催されました。

1) 2006年度会計決算と2007年度予算について

昨年度は第84回IADR大会開催時（6月30日）に評議員会および総会が行われました。このため、すでに前回のNewsletterにおいて、総会評議会における報告、昨年度の事業中間報告および今年度の事業計画、さらに協議による決定事項などを報告させていただきました。

未報告であった2006年度会計決算は、次項目で詳細を掲載しております。この決算は、すでに奥田 克爾監事並びに零石 聰監事による監査承認後、第4回理事会において承認されたものです。また同じく2007年度予算に関しても第4回理事会において承認され、同様に次項目で掲載しております。

2) 理事の追加について

第4回理事会において小田副会長より、第56回学術大会会長の中垣晴男教授（愛知学院大学）を今年度の理事に加えたい旨の提案があり、協議の結果満場一致で承認されました。

3) 事務局委託業務について

第4回理事会において、大谷会長より9月30日にて事務局業務を委託していた（株）コネットとの契約期間が満了したことに伴い、10月1日より同業務をアカデミック・スクエア（株）に移管した旨の説明があり、了承されました。

アカデミック・スクエア（株）との委託契約期間については2007年3月までとし、運営状況に問題がなければ委託を継続していくことを確認いたしました。

4) 最後に

大谷教授がJADRの会長であった2年間幹事を勤めさせていただきました。印象深いことは、JADR理事会において一度も欠かすことなく黒田IADR会長が参席して下さったことです。毎回、IADRにおける詳細な状況を報告して下さり、JADRのIADRにおける位置づけがはっきりしたように感じます。また、JADRが果たすべき未来の展望に希望を感じさせていただきました。この2年間、多くのことを学ぶことができ感謝いたします。

Ⅷ. 会計報告（2006年度決算，2007年度予算）

2006年度決算報告ならびに2007年度予算案の承認につきましては、2006年度JADR総会（2006年6月30日開催）におきまして、下記に記載します誌上での報告で代えることが了承されております。 会計理事 村上 伸也

国際歯科研究学会日本部会2006年度決算
(2005年10月1日～2006年9月30日)

一般会計

【収 入】

	2006年度予算	2006年度決算	執行率	備 考
年会費	10,082,500	10,825,539	107.37%	
正会員	8,580,000	9,057,105	105.56%	06度分1,549名, 05年度分19名
学生会員	137,500	173,434	126.13%	06度分141名, 05年度分10名
部会員	525,000	695,000	132.38%	06度分94名, 05年度分34名, 04年度分11名
賛助会員	840,000	900,000	107.14%	06年度分10社41口, 05年度分1社2口, 04年度分1社2口
日本歯科医学会補助金	800,000	0	0.00%	
IADR大会分配金	1,905,913	1,905,913	100.00%	Baltimore大会
雑収入	1,000	26,790	2679.00%	利息, 第46回学術大会残金繰入等
小計	12,789,413	12,758,242	99.76%	
前年度繰越金	18,167,699	18,167,699	100.00%	
合計	30,957,112	30,925,941	99.90%	
会費納入会員数(延人数)	1,859人	1,870人		

【支 出】

	2006年度予算	2006年度決算	執行率	備 考
通信費	700,000	427,946	61.14%	会費請求, Newsletter, 事務通信費
Newsletter印刷費	560,000	573,300	102.38%	Newsletter2回
総会案内等印刷・郵送費	450,000	0	0.00%	
理事会・監査費	1,830,000	1,243,043	67.93%	理事会3回, 監査, Hatton Award二次審査会, 奨励賞選考委員会
事務費	640,000	463,571	72.43%	コピー・印刷費, 封筒, 役員出張費, 事務局員出張
ブランク作製費	175,000	172,872	98.78%	第53回総会分(5名分)
JADR大会補助金	1,000,000	1,000,000	100.00%	JADR企画シンポジウム演者(5名分)
特別講演謝金	200,000	200,000	100.00%	第53回総会分(4名分)
国際渉外費	1,370,000	1,287,920	94.01%	IADR評議員会(Brisbane)出張旅費(5名)等
次期会長選挙費	500,000	340,365	68.07%	
日本歯科学系学会連絡協議会	50,000	50,000	100.00%	06年分
奨励賞副賞	500,000	400,000	80.00%	第53回総会分(3名分), 第54回総会分(5名分)
雑費(予備費)	50,000	73,424	146.85%	社葬芳名板・弔電代, 祝儀代, 振込手数料
事務委託費	3,630,000	3,512,418	96.76%	会員, 会計, 庶務, Hatton審査, 奨励賞, HP管理, HPリニューアル費
特別会計へ繰入支出	—	10,000,000	—	
小計	11,655,000	19,744,859	169.41%	
次年度繰越金	19,302,112	11,181,082	57.93%	
合計	30,957,112	30,925,941	99.90%	

特別会計

『将来事業計画基金』

【収 入】

	2006年度予算	2006年度決算	執行率
受取利息	1,000	2,554	255.40%
一般会計より繰入収入	—	10,000,000	—
小計	1,000	10,002,554	1000255.40%
前期繰越金	20,000,000	20,000,000	100.00%
合計	20,001,000	30,002,554	150.01%

【支 出】

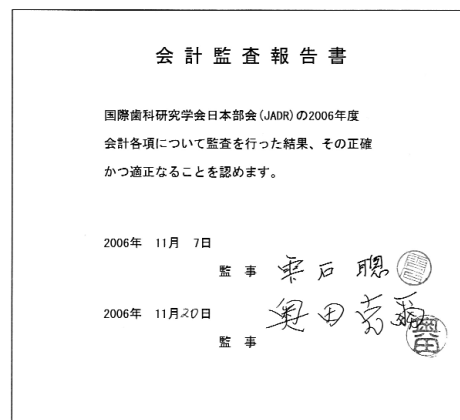
	2006年度予算	2006年度決算	執行率
一般会計へ繰入金	1,000	2,554	255.40%
50周年記念誌制作費	3,500,000	3,032,667	86.65%
小計	3,501,000	3,035,221	86.70%
次期繰越金	16,500,000	26,967,333	163.44%
合計	20,001,000	30,002,554	150.01%

財 産 目 録 (単位：円)

<一般会計>			
(資産の部) 普通預金	東京三菱銀行江坂支店	9,282,121	
普通預金	住友信託銀行千里中央支店	7,207	
郵便振替	日本郵政公社	2,635,000	
未収入金	特別会計 普通預金利息	154	
資 産 合 計		11,924,482	
(負債の部) 未払費用			
06年度業務委託費等		156,362	
Newsletter2006-2制作費、発送費		577,038	
前受会費	07年度以降会費前受分	10,000	
負 債 合 計		743,400	
<特別会計> 将来事業計画基金			
(資産の部) 普通預金	三井住友銀行江坂支店	1,967,487	
定期預金	三井住友銀行江坂支店	5,000,000	
定期預金	東京三菱銀行江坂支店	10,000,000	
定期預金	住友信託銀行千里中央支店	10,000,000	
資 産 合 計		26,967,487	

(負債の部) 未払金 普通預金利息	154
負 債 合 計	154

◎ 以上2006年度会計について2007年11月に下記の通り監査を行った。


国際歯科研究学会日本部会2007年度予算

(2006年10月1日～2007年9月30日)

一 般 会 計
【収 入】

	2007年度予算	2006年度決算	2005年度決算	備 考
年 会 費	9,866,400	10,825,539	10,151,866	
正 会 員	8,349,000	9,057,105	8,814,202	1,518名
学生会員	202,400	173,434	127,664	184名
部 会 員	475,000	695,000	430,000	95名
賛助会員	840,000	900,000	780,000	11社、42口
日本歯科医学会補助金	800,000	0	800,000	
IADR大会分配金	2,000,000	1,905,913	1,760,963	Brisbane大会
雑 収 入	1,000	26,790	38,275	
小 計	12,667,400	12,758,242	12,751,104	
前年度繰越金	11,181,082	18,167,699	16,673,442	
合 計	23,848,482	30,925,941	29,424,546	
会費納入会員数 (延人数)	1,808人	1,870人	1,912人	

【支 出】

	2007年度予算	2006年度決算	2005年度決算	備 考
通 信 費	600,000	427,946	556,042	会費請求 (2回)・Newsletter (2回), 日常事務通信費
Newsletter 印刷費	560,000	573,300	563,220	
総会案内等印刷・郵送費	450,000	0	422,332	総会案内等印刷・郵送費
理事会・監査費	2,190,000	1,243,043	1,671,293	理事会 (4回), 監査, HattonAward二次選考会
事 務 費	640,000	547,571	432,020	コピー代, 封筒代, 諸印刷費, 役員・事務員交通費等
ブランク作製費	0	172,872	171,990	
JADR大会補助金	2,500,000	1,000,000	2,500,000	第55回総会
特別講演謝金	0	200,000	150,000	
国際渉外費	1,300,000	1,287,920	885,751	Council Meeting, PAPF Council Meeting, Hatton Award委員会等
次期会長選挙費	0	340,365	—	
日本歯科学系学会連絡協議会	50,000	50,000	100,000	
奨励賞副賞	0	400,000	250,000	
雑 費 (予備費)	50,000	73,424	81,962	
事務委託費	3,340,000	3,428,418	2,918,664	会員業務, 会員関連事務, 会計業務, 庶務業務等
特別会計へ繰入支出	—	10,000,000	—	
事務センター破産損金	—	—	552,673	
小 計	11,680,000	19,744,859	11,255,947	
次年度繰越金	12,168,482	11,181,082	18,168,599	
合 計	23,848,482	30,925,941	29,424,546	

特 別 会 計

『将来事業計画基金』

【収 入】

	2007年度予算	2006年度決算	2005年度決算
受取利息	1,000	2,554	4,814
一般会計より繰入収入	—	10,000,000	0
小 計	1,000	10,002,554	4,814
前期繰越金	26,967,333	20,000,000	20,000,000
合 計	26,968,333	30,002,554	20,004,814

【支 出】

	2007年度予算	2006年度決算	2005年度決算
一般会計に繰入支出	1,000	2,554	4,814
50周年記念誌制作費	—	3,032,667	—
雑 費	—	—	0
小 計	1,000	3,035,221	4,814
次期繰越金	26,967,333	26,967,333	20,000,000
合 計	26,968,333	30,002,554	20,004,814

内容についてご質問がございます場合は、JADR事務局
()までお問い合わせください。

IX. 第55回国際歯科研究学会日本部会 (JADR)総会・学術大会開催のご案内

大会長 前田 伸子

(鶴見大学歯学部口腔細菌学教室)

会 期:平成19年11月17日(土), 18日(日)

会 場:鶴見大学記念会館

(〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3)

日 程:平成19年11月16日(金)理事会, 理事懇親会

11月17日(土)学術大会, 会員懇親会

11月18日(日)学術大会, JADR協賛公開シン
ポジウム

場 所:鶴見大学記念館(学術大会)

会員懇親会(パンパシフィックホテル横浜)

理事会/理事懇親会(ロイヤルパークホテル横浜)

JADR協賛公開シンポジウム(鶴見大学会館)

演題申込締切:9月1日(土)を予定

大会長:前田伸子(鶴見大学歯学部口腔細菌学教室)

準備委員長:平下斐雄(鶴見大学歯学部矯正学講座)

準備事務局:鶴見大学歯学部口腔細菌学教室内

E-MAIL: microbiology@tsurumi-u.ac.jp

内 容:特別講演, シンポジウム, ランチョンシンポジウム,
市民公開シンポジウム, 一般口演,
ポスターセッション, 展示, その他

詳細はJADRホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/>)にてお知らせします。

第55回JADRを主管するにあたって

このたび、平成19年11月17日(土)、18日(日)の2日間、鶴見大学記念館および鶴見大学会館におきまして第55回 JADR 学術大会・総会を開催する運びとなり、現在鋭意その準備を進めております。皆さま方、良くご存知のようにJADRは国際歯科研究学(International Association for Dental Research; IADR)の日本部会として1953年に発足し、現在では、IADR全会員中、アメリカ部会に次ぐ第2番目の会員数を擁する大きな部会となり、国際的に活発な学術活動を繰り広げています。その主な活動の一つが毎年1回行われる学術大会・総会で、数多くの研究成果が発表され、学際的な雰囲気の中で活発な討論が展開されております。現在、歯科領域の研究者が口腔を通じて全身の健康を守るため、総力を挙げて行ってきたさまざまな研究の成果は一応の勝利を収めているかのような感があります。しかし、いまだに難病であるシェグレン症候群患者が被る苦痛やAIDS罹患患者の口腔に発現するさまざまな病態に対する根本的な治療法はなく、希望の光は見えないものの歯の再生治療は実現していません。あるいは日本を先頭に革新的に進んだ歯科材料の開発はminimum intervention (MI) を可能にしましたが、材料と組織との間の相互関係の詳細は必ずしも明確になっているわけではありません。そこで、今年度の第55回学術大会では「口腔と全身の健康を守るための新戦略」をメインテーマに掲げ、いまだに問題を抱える、あるいは、その詳細が明らかになっていない分野に焦点を当て、それぞれの分野で最先端の研究に取り組んでおられるspeakerに特別講演、ランチョンセミナー、シンポジウムなどをお願いいたしました。また、JADRの学術大会では従来から英語と日本語をofficial languageとして行って参りましたが、今回から、英語での発表の比重を増やすことを目的とし、IADR会長Dr. Deborah Greenspanをはじめとしてアメリカ、ドイツ、オーストラリア、韓国および台湾から、各国のトップレベルの研究者をお招きし、今まで以上に国際的な雰囲気を盛り上げるべく計画いたしました。多くの会員のご参加をお待ちしております。

主なプログラム

【特別講演】

特別講演1; Deborah Greenspan IADR会長(2007年)11月17日(土) 11時~12時

特別講演2; KADR会長

特別講演3; 砂川賢二教授

【ランチョンセミナー】

ランチョンセミナー1; Dr. Harold C. Slavkin (南カリフォルニア大学)

ランチョンセミナー2; Dr. E. C. Reynolds (メルボルン大学)

ランチョンセミナー 3 ; Dr. Seunghee Cha (フロリダ大学)
ランチョンセミナー 4 ; Dr. John Dawson Ruby (アラバマ大学)
高橋信博教授 (東北大学)

【シンポジウム】

シンポジウム1 ; 再石灰化技術の現状とセルフケアツールとしての特保の可能性に関する内容を予定しています。

Potential speakers: Dr. E. C. Reynolds (メルボルン大学) 他

シンポジウム2 ; Dentin regeneration and resin restoratives - Partnership or hostility

Moderator: 今里 聡助教授 (大阪大学)

Potential speakers: Dr. Gottfried Schmalz (Dental School, University of Regensburg) 他

シンポジウム3 ; シェーグレン症候群の基礎と臨床に関する内容を予定しています。

Moderator: 斎藤一郎教授 (鶴見大学)

Potential speakers: Dr. John Greenspan (南カリフォルニア大学) 他

シンポジウム4 ; Oral bacteria and sepsis (仮題)

Moderator: 奥田克爾教授 (東京歯科大学), 坂本春生助教授 (東海大学医学部付属八王子病院)

Potential speakers: Dr. Yuh-Yih Lin (School of Dentistry, Chung Shan Medical University) 他

【JADR協賛の公開シンポジウム】

市民公開シンポジウム ; 子供たちの食育に関する内容を予定しています。

新ハイテクリサーチセンター公開シンポジウム ; ひとりひとりの顎と体にやさしい歯の補綴と噛み合わせ-顎口腔領域の運動を再現するシミュレーションロボットの開発-

X. 第85回IADR総会・学術大会 (New Orleans) のレポーター募集

ご存知のとおり2007年3月21日(水)~24日(土), New Orleansで第85回IADR総会・学術大会が開催されます。つきましては、JADR 会員の先生方からIADR 大会の様子など9月発行予定のJADR Newsletter第2号にご紹介いただきたくご案内いたします。総会へ初めて参加される方からでも大歓迎です。レポーターをお引受けいただける先生は、大会報告を4月27日(金)までに事務局へお送り下さい。多数お待ちしております。

字数: 1200字程度 締切: 4月27日(金)

執筆内容: 第85回IADR New Orleans大会に各自が参加し

た分野の報告。シンポジウム, ポスター, 口頭発表などから自由に記載 (過去のニュースレター参照)

原稿送付方法: TEXT fileかMS WORDで, E-mail
にて事務局へ送付

XI. Hatton Award 応募候補者(2008年度IADR, Toronto, Canada)の募集

(応募資格の一部変更についてのお知らせ)

2008年度のHatton Award応募候補者を募集します。

応募ご希望の方は5月以降にHPに掲載します応募要領をご覧の上ご応募下さい。

本賞は第10代IADR会長Edward Hatton博士の功績をたたえて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。応募カテゴリーは、Junior部門, Senior- Basic Science部門, Senior- Clinical Research部門の3部門です。各Divisionから推薦を受けた候補者は第86回IADR総会の前日に行われるHatton Award本選にてPoster-Discussion形式での審査を受け、各部門上位2名が順位付けで受賞者に選ばれます。

なお、各カテゴリーへの応募資格と研究内容の区分は、以下ようになります

Junior部門:

歯学部学生による研究発表です。歯学部在籍中に行った研究が対象となります。基礎研究, 臨床研究を問いません。

Senior部門:

大学院在籍者, 研究生, 専攻生等による研究発表です。博士号既得者の場合, 本選時に博士号取得後3年以内であれば応募できます。

Senior部門は、下記2つの分野に分かれます。

- Basic Science Research: Involving laboratory or animal research
- Clinical/Pre-clinical Research: Involving research on human subjects and/or epidemiologic studies

CONTENTS

I. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して	1	I. Greeting of the New JADR President Dr. Yutaka Oda: JADR President	1
II. JADR会長職を退いて	2	II. Experience as President of JADR Dr. Keiichi Ohya: JADR Past President	2
III. 新任・退任理事からの挨拶	2	III. Greetings from Director new appointment / retirement	2
1 JADR退任理事からの挨拶	2	1. Greeting from Director retirement Dr. Junichiro Iida: JADR Past Director	2
2 理事退任にあたって	2	2. On the director retirement Dr. Susumu Imai: JADR Past Director	2
3 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) の思い出	3	3. Memories of JADR Dr. Kimiya Nemoto: JADR Past Director	3
4 JADR新任理事からの挨拶	3	4. Greeting from the New JADR Director Dr. Tsukasa Sano: JADR Director	3
5 JADRの理事を拝命して	4	5. Be ordered Director JADR Dr. Haruo Nakagaki: JADR Director	4
6 JADR新任理事として	4	6. As the New JADR Director Dr. Yutaka Nakajima: JADR Director	4
7 ご挨拶	5	7. Greeting Dr. Nobuhiro Hanada: JADR Director	5
8 JADR新任理事としてのご挨拶	5	8. Greeting as the New JADR Director Dr. Toshihiro Hirai: JADR Director	5
IV. 2006年度学術奨励賞を受賞して	6	IV. 2006 Young Investigator Award of JADR Dr. Mitsuaki Ohno: Okayama Univ.	6
V. Education Research Group Faculty Travel Awardを受賞して	8	Dr. Yasuyo Sugawara: Okayama Univ.	6
VI. 第7回アジア予防歯科学会学術大会を主催して	8	Dr. Riyoko Tamai: Asahi Univ.	6
Dr. Kazutoshi Higuchi: Tokyo Med. Dent. Univ.	7	Dr. Junpei Washio: Tohoku Univ.	7
Dr. Mika Kogure: Meirin Univ.	8	V. Education Research Group Faculty Travel Award	8
VII. 理事会総括報告	9	Dr. Ryusei Yamamoto: The Chairman of the 7th Congress of Asian Academy of Preventive Dentistry	8
VIII. 会計報告 (予算・決算・監査)	10	Dr. Kazuhiro Aoki: JADR Deputy Executive Director	9
IX. 第55回JADR総会・学術大会のご案内	12	VII. Reports of the meeting at the Board of directors	10
X. 第85回IADR総会・学術大会 (New Orleans) のレポーター募集	13	Dr. Shinya Murakami: JADR Director of accounts	10
XI. Hatton Award 応募候補者(2008年度IADR, Toronto, Canada) の募集 (応募資格の一部変更についてのお知らせ)	13	VIII. Reports of the accounts of JADR 2006-2007 (A budget / the settlement of accounts / inspection)	10
		Dr. Nobuko Maeda: The Chairman of the 55th JADR Academic Meeting	12
		IX. Announcement of the 55th JADR General Session	13
		Dr. Nobuko Maeda: The Chairman of the 55th JADR Academic Meeting	12
		X. Call for Reports of the 85th IADR General Session in New Orleans	13
		XI. Call for the Hatton Awards Competitors of the 86th IADR General Session in Toronto (2008) from JADR	13

●編集後記●

例年、ニュースレター1号は2月に発行されておりますが、今回は事務引継ぎに伴う編集作業の不慣れ等もあり、発送がIADR New Orleans大会の直前までずれこんでしまいました。ご多忙の中、早くからご寄稿下さいました先生方には大変申し訳なく存じております。

さて今回のニュースレターは、第54回JADR大会が昨年7月の第84回IADR大会と併催のかたちでBrisbaneで行われたことから、記事構成がやや異なり、2007年1月1日付けで交替された新旧JADR会長および理事各位からの新任・退任のご挨拶と、2006年度奨励賞受賞者の受賞報告を中心とした内容となっております。特に新任理事各位にはご無理申し上げましたが、お寄せいただいた挨拶文には、いずれもJADR活動への強い想いとJADRの今後の方向性を示唆する具体的な提言が見られ、読んでいて大変心強い思いがいたしました。JADR新執行部を会員により良く知ってもらう上でも、今回の企画はよかったのではないかと感じております。

本ニュースレターは電子版がHPにも掲載され、大変アクセスが良くなっております。会員各位の情報交換の場として活用していただければ幸いです。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <http://www.soc.nii.ac.jp/jadr/index.html>

連絡先: 〒612-8082 京都市伏見区両替町2-348-302

アカデミック・スクエア (株) 内 TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773

JADR副会長 高野吉郎 (東京医科歯科大学大学院硬組織構造生物学分野)

連絡先: 〒113-8549 東京都文京区湯島1-5-45 FAX: 03-5803-5439

2007年2月28日 発行